

石巻健育会病院

症 例 概 要 患者氏名：T.Tさん（40代 男性） 病名：脳出血（左視床出血）

入院期間：平成29年9月中旬～平成30年2月中旬

経過：平成29年8月下旬職場の会議中に右上下肢の脱力あり。救急要請し、S病院に救急搬送され、右上半身に麻痺と感覚障害、失語症が認められた。保存療法を施し9月中旬にリハビリ目的で当院に転院。右上下肢に重度の麻痺と感覚鈍麻を認めひとりで起き上がることも困難な状況であった。本人の「歩いて帰り、仕事に復帰したい」という強い希望から、回復期リハビリテーション病棟でリハビリを実施し、入院時運動FIM16点から退院時には運動FIMは80点まで改善し杖歩行まで可能となった事例。

内 容

T.Tさんは、回復期リハビリテーション病棟に入院時、右上下肢に僅かな収縮を認める程度の重度片麻痺と感覚脱失を認め、左上肢で柵を掴んで上半身を起こすことが精一杯で、日常生活全般に介助を必要とする状態でした。脳出血の部位は視床でしたが、被殻を含めた広範囲にまでおよび入院時の予後予測では、麻痺や感覚障害の改善は困難を極め、車椅子生活が予測されました。しかし、主治医の石田医師から患者T.Tさんの将来を考えた専門的なリハビリテーションの検討と実施の処方を受け、患者Tさんの退院後の復職までを含めた長期的なリハビリ計画を立て実現に向けてリハビリを実施してきました。T.Tさんは40代と当院回復期リハビリテーション病棟に入院される年齢としては若く、重度の片麻痺に加え感覚障害のある患者さんに復職までを想定したリハビリの介入は前例にありませんでした。そこでリハビリでは石田医師の予後予測を基に、入院翌週から長下肢装具の作製をすすめ身体機能の回復と歩行の獲得、麻痺の改善と併用しての利き手交換など代償手段の獲得も早期から実施してきました。リハビリが進み入院2ヵ月が経つ頃から徐々に日常生活動作の介助量は減り自立してできることが増えていきました。しかし、その一方で右半身の重度の麻痺や感覚障害に変化がないことに不安と焦りをT.Tさんは感じていましたが、病棟で石田医師に会う度に受ける激励から自信を取り戻し、「後悔しないようにできる限りのことをしていきたい」と自主練習のメニューの追加を希望され、更にリハビリに対して意欲的に取り組んでいくようになりました。その結果、当初の予測通り後遺症は残存しているものの、入院時の運動FIMが16点であったのが、退院時には80点まで改善を認め、歩行も短下肢装具を装着してT字杖歩行自立にまで至りました。2月中旬の退院後は、日中の妻が仕事に行っている時間での、家庭内役割の獲得、復職に向けた継続的なリハビリの提案を行い、老人保健施設しおんで継続的なリハビリを行い、1年後に病前に勤務していた市の職員として職場復帰予定となっております。